

SHOW HEYシネマルーム

★★★★★

戦火のナージャ

2010年・ロシア映画
配給/コムストック・グループ、ツイン
150分

2011 (平成23) 年3月29日鑑賞

GAGA試写室

Data

監督・共同脚本・製作：ニキータ・ミハルコフ

出演：ニキータ・ミハルコフ/オレグ・メンシコフ/ナージャ・ミハルコフ/ビクトリア・トルストガノワ/セルゲイ・マコベツキー/エブゲーニイ・ミロノフ/ドミートリ・ジュゼフ

👁️👁️ みどころ

2時間40分の『12人の怒れる男』(07年)も重厚だったが、同じニキータ・ミハルコフ監督による、父と娘の絆を問う2時間30分の戦争大作も重厚!また、ロシア映画史上最大の製作費を投入したという本作の、次から次へと続くド肝を抜く戦闘シーンは圧倒的だ。

もっとも、本作のテーマや美しいラストシーンを理解するためには独ソ戦争やモスクワ攻防戦の理解が必要だし、スターリン批判も勉強する必要がある。それはそれでしんどいが、同じ料金を払うのなら絶対こんな映画を観なきヤン!

■□■また、重厚なロシア映画の名作が誕生!■□■

アメリカのスティヴン・スピルバーグ監督と聞けばなじみがあるが、ロシアのニキータ・ミハルコフ監督と言われても、「そりゃ一体誰?」という人が多いはず。彼を国際的な巨匠にしたのは、1994年の監督・脚本・主演作『太陽に灼かれて』だが、残念ながら私はこれを観ていない。私がミハルコフ監督の名前を記憶に刻んだのは、08年7月に『12人の怒れる男』(07年)を観た時。言うまでもなく、これは陪審映画としてもっとも有名なアメリカ映画の1957年の名作『十二人の怒れる男』のリメイク版だが、日本では裁判員制度が始まった時期と重なったこともあって大いに話題を呼んだ。そんな重厚かつヒューマンな問題提起をした2時間40分のロシア版の出来は最高だった(『シネマルーム21』215頁参照)。

本作のプレスシートによると、ミハルコフ監督は『プライベート・ライアン』(98年)

を観ているときに本作のアイデアが浮かんだそうだし、「こういった作品がかつてロシアにあったか?という疑問を自分に投げかけることで、さらに本作を制作するモチベーションが高まった」とのことだ。『プライベート・ライアン』は、『プライベート・ライアン』と『鼻の城』に見る「公と私」というタイトルで、私が00年7月号の法律のサンルーム『法苑』(第120号)(新日本法規出版株式会社)に掲載したように、強く私の印象に残った(『シネマルーム1』117頁参照)が、それはミハルコフ監督も同じだったらしい。『プライベート・ライアン』は「第2次世界大戦での連合軍のノルマンディ上陸作戦を背景としながら、ライアン二等兵の生き方に焦点をあてて描いた」ものだが、本作はミハルコフ監督自身が主演する父親アレクセイ・セルゲーヴィチ・コトフとその娘ナー ज्या(ナー ज्या・ミハルコフ)との、互いに再会を願う気持を軸としながら、スターリンが指導した第2次世界大戦の惨状をロシアの側から描いたもの。テレビでは軽薄なアホバカバラエティー番組が垂れ流され、さらに安易な企画と単純なテーマによる凡庸な邦画が次々と公開される中、こんな重厚かつヒューマンな映画は滅多にお目にかかるものではない。映画ファンならずともこれは必見!2時間30分はしんどいが、それだけの値打ちがあることは私が保証!

■軸をしっかりと!そうでないと・・・■

バカ丁寧に何でも説明してくれる単純な邦画と違い、ロシアの巨匠が生み出す2時間30分の戦争大作は、登場人物は少ないものの1つ1つのストーリーのスケールがバカデカイ。したがって、登場人物やストーリーの軸をしっかりと確認しておかなければ全体像がみえなくなる恐れがある。スターリンの名前は私たちの世代なら誰でも知っているが、若い世代では知らない人も?したがって、まずは冒頭に登場するスターリンがKGBの幹部であるドミートリ・アーセンティエフ大佐(オレグ・メンシコフ)に対して「コトフについて知っていることは?」と質問するシーンの意味を押さえる必要がある。次は、スターリンの誕生日を祝うシーケンスで、思いもかけずスターリンの顔を大きなケーキに押しつけるシーン。これは一体ナニ?

落語でいえばこれはあくまで「枕」。2時間30分の大作のストーリーの軸の1つは、コトフとアーセンティエフ大佐との男同士の因縁と確執だ。コトフの若く美しい妻マルーシャ(ビクトリア・トルストガノワ)はアーセンティエフ大佐の元恋人。マルーシャとの仲をコトフの巧妙な策略によって引き裂かれたと信じるアーセンティエフ大佐は、スターリンの大粛正に乗じて憎き恋敵への私怨を果たしたが、それって完璧な公私混同では?もう1つのストーリーの軸は、マルーシャとコトフとの間に生まれた一人娘ナー ज्याをアーセンティエフ大佐が密かにかくまってやったこと。それは反逆者の娘が生き延びる唯一の道であり、ある意味でアーセンティエフ大佐の後ろめたさの裏返しだったが、1941年6月にナチス・ドイツとの間で始まった独ソ戦争の中で引き裂かれてしまった父コトフと娘

ナー ज्याの再会への希望は？そんな軸をしっかりと確認したうえで、ニキータ・ミハルコフ監督が描く壮大なストーリーをしっかりと楽しみたい。

■□■ド肝を抜く戦闘シーンの連続に大興奮！その1■□■

スティーヴン・スピルバーグ監督の『プライベート・ライアン』における冒頭の戦闘シーンもすごかったが、馮小剛（フォン・シャオガン）監督の『戦場のレクイエム（集結号）』（07年）のそれもすごかった。もっとも、『戦場のレクイエム（集結号）』は17億円の制作費の大半を最初の戦闘シーンで使ってしまったから、後半は馮小剛監督得意の人情モノ、感動モノに転調した（『シネマルーム22』218頁参照）。しかし、製作と準備に8年もかけ、ロシア映画史上最大となる巨額の制作費を投入したという本作には、ド肝を抜く戦闘シーンが次々と登場する。その迫りに圧倒され大興奮することまちがいなさだ。

まず最初は、1941年6月にソ連への侵攻を開始したドイツ軍機が政治犯たちが入っている強制収容所や逃げまどう大勢の農民たちを爆撃するシーン。政治犯としてこの強制収容所で重労働を強いられたコトフはとっさの機転で逃げ出し、川の中にじっと身をひそめながら爆撃のサマを目撃していたが、その迫力は圧倒的！

■□■ド肝を抜く戦闘シーンの連続に大興奮！その2■□■

次は、従軍看護師として乗り込んでいたナー ज्याの赤十字の船が、1941年8月ドイツ軍機による一斉射撃を受けて沈没するシークエンス。そのきっかけは「そんなバカな！」と思うようなちょっとした手違いだったが、それがこれほどの悲劇的な結末を生もうとは。

もっとも、司祭と共に機雷にしがみついたナー ज्याは海の中を漂いながら洗礼を受けたおかげ（？）で一命をとりとめるが、ここでは特権を笠に着てワガママ放題をやっていたある家族の悲劇（喜劇？）が面白い。この奇跡の生き延びによって、ナー ज्याは生き別れた父親を捜すことが自分の使命だと覚るわけだが、この一連のストーリー展開は息もつけないほどの大迫力！

■□■ド肝を抜く戦闘シーンの連続に大興奮！その3■□■

第3は、雨と霧に煙る平原でのソ連軍とドイツ軍の激突。とは言っても、コトフが一兵卒として加わっている懲罰部隊とドイツの戦車部隊との激突だから、もともとその勝敗は明らかだが、ここでは合流してくる若い士官候補生のエリートたちと懲罰部隊との「やりとり」が面白い。要塞づくりを命じられていた懲罰部隊の隊長は歴戦の強者だからエリート部隊とのやりとりに圧勝し、完全な指揮権を握ったが、敵が後ろからやってこようとは・・・。

一人の若い士官候補生は構築中の要塞の後方から鳴り響く不気味な地鳴りをモスクワからの援軍の到着だと早とちりし、大声をあげながらこれを迎えにいったが、彼がそこで目

にした風景とは・・・？これが本作最大の戦闘シーンだが、戦車部隊と貧弱な装備の歩兵との激突の結果は火を見るより明かだ。しかして、リーダーシップを発揮していたあの隊長は無事？コトフは無事生き残れたの？

■□■ド肝を抜く戦闘シーンの連続に大興奮！その4■□■

第4は、戦闘シーンというよりも「蛮行」としかいえないような、ドイツ軍による村人全員の焼き討ちシーン。織田信長が1571年9月に比叡山の僧侶たちを、山ごと焼きつくし殺しつくしたことは有名。この暴虐非道な行為は世間からも、また明智光秀などの身内からも批判の声が上がったが、これはあくまで信長独特のしっかりした価値観にもとづくもの。しかし、本作に見る焼きつくしシーンは赤十字の船を攻撃して沈没させたシーケンスと同じく、ちょっとした手違いもしくは一人のドイツ軍兵士の悪しき行動に端を発したものだから、その悲劇はやり切れない。

若い娘が父親を捜しながら一人各地を放浪するのは大変。たまたまナージャがある田舎の村に滞在していた時、自転車に乗ったドイツ軍兵士に発見されたのが悲劇の始まりだった。

一人の村人の助けを受けてナージャは何とかそのドイツ兵をやっつけ、すぐに山手に逃げることができたが、戦友を殺されたドイツ軍による犯人捜しと犯人が見つからないことによる蛮行とは？なぜ、誰の判断で、こんな蛮行が？



©2010, GOLDEN EAGLE

■□■この牧歌的な美しいシーンに注目！■□■

本作は1941年6月から始まった独ソ戦を背景に次から次へと迫力ある戦闘シーンを見せてくれるが、その合間に時々登場するのが、1936年夏のある美しい風景。ポートに乗った父コトフと娘ナージャは、ホントに幸せそうだ。

コトフは革命の英雄だから、スターリンの肅正とアーセンティエフ大佐による密告がなければ、父と娘は美しい妻マルーシャと共に平穏な生活を営んでいたはず。もちろん、独ソ戦が始まればコトフには新しい任務が与えられるだろうが、それはあくまで陸軍大佐という地位に応じたまっとうな任務だったはず。ところが、本作にみるコトフの現実、強

制収容所での重労働や懲罰部隊への送り込みなど大変な苦勞続き。それは従軍看護師になったナー ज्याも同様で、何とも過酷な体験を次から次へと強いられることに。そんな父と娘がふと思っておすのが、1936年夏のあの美しいシーンだから、本作ではそれに注目！

■スターリングラード攻防戦VSモスクワ攻防戦■

独ソ戦を大きく転換させ、結果的に第2次世界大戦のターニングポイントになったのは、1942年のスターリングラードにおける攻防戦。ジュード・ロウが狙撃兵（スナイパー）に扮した『スターリングラード』（01年）は、その攻防戦を観客にもものすごい集中力を要求しながら鮮やかに描いた名作だった（『シネマルーム1』8頁参照）。しかし、本作のラストで描かれるのはそれではなく、1941年のモスクワ攻防戦。

ナチス・ドイツ軍最大の特徴はスピード。つまり、電撃作戦がヒトラーの得意技だ。1941年6月にソ連への侵攻を開始したドイツ軍は9月には首都モスクワに入り、クレムリンまであと数十kmのところまで迫った。プレスシートにある飯島一孝氏の「ロシア人の気質を知るうえで必見の映画。」によれば、この「モスクワ攻防戦」でドイツ側約61万人、ソ連側約190万人、双方合わせて約250万人の戦死者が出たそうで、この数字は二つの世界大戦のどの戦闘よりもはるかに多いらしい。ところがこの攻防戦が世の中であまり知られていないのは、「この後、ソ連軍は態勢を立て直し、最終的にドイツ軍を破るが、緒戦の攻防戦では大敗を喫したためヤミに葬ったから」らしい。歴史をどう学ぶかは難しいものだ。したがって、今ナー ज्याが従軍看護師として働いているモスクワ攻防戦では、圧倒的にソ連軍が劣勢だったわけだ。

■美しいラストシーンに注目！■

本作のラストシーンは、何とも美しい。長期化する市街地での攻防戦が大変なことは当然だが、ラストのシークエンスは重傷を受けて血まみれとなり全く動けなくなった若い兵士に、ナー ज्याが必死の手当てをするシーンから始まる。ナー ज्याはモルヒネを打ち包帯を巻き懸命の手当てを施したが、この傷ではそんな手当てでも無駄なことは明らか。しかし、看護師たるものそれでもなお言葉で元気づけ、可能な限りの手当てをするのが職分だから懸命の手当てをしていたが、その中でなぜか兵士の視線はナー ज्याの胸元へ。冬将軍到来直前のモスクワは寒いが、懸命の手当てをするナー ज्याのシャツの胸元は少し乱れていたから、若い兵士の視線にはナー ज्याの白く美しい肌がチラリと見えていたようだ。

そんな中、「まだ女の子とのキスの経験もない」と告白した兵士の口から出た言葉は、「君の胸を見せてくれ」というとんでもないもの。そんな要請に応える義務が看護師にないのは当然だが、誰もいない「戦場」の中でそんな懇願を受けたナー ज्याがとった行動とは？本作では、そんな美しいラストシーンにも是非注目！

2011（平成23）年4月9日記